

# 賢治の山男像

——典拠の可能性——

工藤哲夫

(以下の注の記号・番号の内、アルファベットは内容に関する補注、アラビア数字は出典・文献注を表す。)

## 一 『山の人生』

多田幸正は、柳田国男の「山男に直接関連する論考」<sup>(1)</sup>を年代順に十点あげ、「これらの著作のうち、賢治が〈山男もの〉の童話を執筆するに際して参照したもの」として、終わりの二点、即ち『山の人生』(大正十四年一月から『アサヒグラフ』に連載、翌十五年十一月、増補したものを郷土研究社から刊行)と「遠野物語拾遺」(明治四十三年刊行の『遠野物語』に、同じ佐々木喜善の蒐集になる「拾遺」二九九話を加え、増補版として昭和十年、郷土研究社より刊行)を外した(即ち、賢治が参照しなかったとした)。これは、「狼森と策森、盗森」の大正十年十一月、「山男の四月」の大正十一年四月、「また「祭の晩」と「紫紺染について」は、前者が大正十三年頃、後者が大正十三年〜十四年頃に清書されたと推定されているだけで、いずれも正確な時期はわからない」という「山男もの」の成立時期からの「推測」<sup>(2)</sup>である。

しかし、多田幸正の示している限りのデータの拠つても、「紫紺染について」の「清書」が「推定」「大正十三年〜十四年頃」なら、少なくとも「大正十四年一月から『アサヒグラフ』に連載」した方の「山の人生」は、「参照した」可能性がある理屈になる。

以下、「成立時期」ともからめ作品の二つの内部徴憑から、初出の「山の人生」ではなく刊本の『山の人生』参照可能性の仮説を呈示したい。

一つ目は、「[祭の晩]」の次の場面に関する。

その時、表の方で、どしんがらがらと云ふ大きな音がして、家は地震の時のやうにゆれました。亮二は思はずお爺さんになりつききました。お爺さんも少し顔色を変へて、急いでラムプを持って外に出ました。

亮二もついで行きました。ラムプは風のためにすぐに消えてしまひました。

その代り、東の黒い山から大きな十八日の月が静かに登つて来たのです。

見ると家の前の広場には、太い薪が山のやうに投げ出されてありました。太い根や枝までついた、ぼりぼりに折られた太い薪でした〔後略〕<sup>(3)</sup>

初出の「山の人生(三〇)」「『アサヒグラフ』第五卷第七號(大14・8・12)五頁」には書かれていない『山の人生』の次の箇所が(報恩という)情況及び表現(「どしん」・「大」・「音がし」)を一にする。

又閉伊郡の六角牛山では、青笹村の某が山に入つてマダの樹の皮を剥いて居ると、ちつと立つて見て居た七尺餘りの男があつた。それもすけてやるべとさながら麻を剥ぐやうに、忽ちにしてもう澤山になつた。それから傍の火にあぶつて置いた餅を指ざし、く

れといふから承知をすると、無遠慮に皆食つてしまつた。來年の今頃も又來るかと思はれ故に、後難を恐れてもう來ないと思はると、  
そんたら三升の餅をいつくの晩に、お前の家の庭へ出して置いてくれ、一年中のマダの皮を持つて往つて遣るからといふので、  
是も其通りにして見ると翌年は約束の日の夜中に、庭でどしんと大荷物置く音がした。凡そ馬に二駄ほどのマダの皮であつたと  
謂ふ。それから以後は毎年同じ日に、此家の庭上で所謂無言貿易は行はれたのだが、今の主人の若年の頃から、どうしたものか餅  
は供へて置いても、マダの皮は持つて來ぬやうになつたと謂つて居る。<sup>(4)</sup>

余りに似過ぎていて、影響関係が無いと考えるのが難しい。そしてこれは、多田幸正が「賢治の山男像の造形から」「関  
連が深いように思われる」<sup>(5)</sup>という(先述の「十点」の中の)「山人外伝資料」に載っていないものなのである。<sup>(a)</sup>

実は、右のことは既に先行研究によつて指摘されている点である。<sup>(12)</sup>それで、今般、右に付け加えて、『山の人生』の、右  
引用部に引き続き箇所を新に指摘したい。

津輕舊事談に弘藩明治一統志其他を引いて、岩木山の大人と親善だつたと記して居るのは、麓の鬼澤村の彌十郎といふ農夫であ  
つて、是は後に自分も亦、大人となつて行方を知らずとも傳へられる。彼は最初薪を採りに入つて偶然と懇意になり、角力などを  
取つて日を暮し、素手で歸つて來ると必ず一夜の中に、二三日分ほどの薪が家の背戸に積んであつた。<sup>(13)</sup>「後略」

先の箇所では(山男が運んで来てくれたものは)「マダの皮」であつた。(それに引き続き)この箇所では「薪」である。  
賢治は、「どしん」の場面と「薪」を合成して「[祭の晩]」の場面を描いたのではなからうか。

二つ目は、「紫紺染について」の初めの方に出ている「古びた写本」の内容、

「一、山男紫紺を売りに酒を買ひ候事、

賢治の山男像

山男、西根山にて紫紺の根を掘り取り、夕景に至りて、ひそかに御城下（盛岡）へ立ち出で候上、材木町生菓商人近江屋源八に一俵二十五文にて売り候。それより山男、酒屋半之助方へ参り、五合入程の瓢箪を差出し、この中に清酒一斗お入れなされたくと申し候。半之助方小僧、身ぶるえしつゝ、酒一斗はとも入り兼ね候と返答致し候処、山男、まづは入れなさるべく候と押しして申し候。半之助も顔色青ざめ委細承知と早口に申し候。扱、小僧ますをとりて酒を入れ候に、酒は事もなく入り、遂に正味一斗と相成り候。山男大に笑ひて二十五文を置き、瓢箪をさげて立ち去り候趣、材木町総代より御届け有之候。<sup>(14)</sup>

に関する。

多田幸正は、右の箇所に関連して、次のように述べている。

「前略」酒屋で酒を買うとき、この山男は五合ほど入る瓢箪を差し出し、それに清酒を一斗入れよという。酒屋の小僧が、恐れ怪しみながら升で量って入れると、酒は正味一斗疑いなく入った。これと同じ伝承は見当たらないが、柳田国男の『山の人生』に紹介されている山姥の話——姥が三合徳利を携えて五升の酒を買いに来るが、素直に山姥のいう通りに量ってやると、果たして際限もなく入った——に類似する。山姥の一般的な伝承によれば、買い物に来るのは歳末や年頭の市日であり、そのとき山姥の支払った金に福が宿るとか、持参した徳利に酒を入れてやったものは金持ちになるとかいわれている。『山の人生』の山姥の話の場合も、三合徳利で五升の酒を買いに来た山姥を笑ったものは罰せられ、素直にいう通りにしたものは、際限なく入る酒にあやかつて金持ちになるとある。このように山姥は里人に吉凶禍福をもたらす両義的存在とみなされるわけだが、賢治がそうした伝承の山姥に部分的にせよ類似した山男を描いていることは、彼の描く山男の容貌が山の神の特徴を持つていふことと同様注目してよいだろう。<sup>(15)</sup>

（原注番号を省略）

『山の人生』の該当箇所は次の通りである。（これも初出の「山の人生（二六）」『アサヒグラフ』第五卷第二号（大14・7）

8)には書かれていない。

〔前略〕信州南安ホツネでは新田の市、北安曇では千國の市などに、暮の市日に限つて山姥が買物に出ると云ふ話があつた。山姥が出る人と人が散り、市が終りになるとも言つたが、一方には山姥が支拂に用ゐた錢には、特別の福分があるやうにも信じられた。漸く利欲といふものを實習した市人が、如何に注意深く只の在所の婆様たちを物色して居たかは、想像して見ても面白い。其爲でもあらうか今も昔話の一つに、山姥が三合ほどの徳利を携へて、五升の酒を買ひに來たと云ふのがある。笑つた者は罰せられ、素直に言ふ通りに置つて違ると、果して際限も無く入つたと謂ひ、又は之にあやかつて金持になつたと謂ふ、つまりは俵藤太の取れども盡きの實など、系統を同じくした歴史的空想である。

筑前甘木の町の乙子市、即ち十二月最終の市日にも、山姥が出るといふ話が古くからあつた。正徳四年に成る山姥帷子記といふ文に、天正の比下見村の富人大納言なる者の下僕、木綿綿を袋に入れて此日の市に賣りに出で、途中に假睡して市の間に合はなかつた、眼が覺めて見ると袋の綿は既に無く、其代りに一枚の帷子が入つて居た。地籠くして青黄黑白の段染であつた。これも山姥の物と認められて、寶物として二百年を傳へたといふ話を書留めて居る。<sup>(16)</sup>

多田幸正の言う「山姥の一般的な伝承」というのが何に基づくのか(書かれていないので)不明である(『山の人生』中の記述とも少し異なっている)が、それはともかくとして、確かに「類似」している。しかし、多田幸正は、「山の人生」及び『山の人生』を賢治が「参照」することは不「可能」だったという見解に立つので、必然的に「類似」を「参照」可能性の証拠とすることは叶わず、「注目」を促すだけに留まらざるを得なかつた。

実は、多田幸正の論文には初出があつて、そこでは、前引「祭の晩」と「紫紺染について」は、前者が大正十三年頃、後者が大正十三年〜十四年頃に清書されたと推定されているだけで、いずれも正確な時期はわからない」の箇所は、「祭の晩」と「紫紺染について」の成立時期ははっきりしないけれども、大正十三年頃には書き上げられていた可能性が強い<sup>(17)</sup>

(原文横書き)となっていた。そして「紫紺染について」に関する根拠として、「原稿の第四葉までは作者の自筆だが、第五葉以下の九枚は大正十三年二月から十五年三月までのある時期に、当時花巻農学校の生徒だった松田浩一が、賢治の依頼で筆写したものである」という<sup>(18)</sup>。「校本宮沢賢治全集第九巻、校異、P.409、筑摩書房、1974。」(ママは工藤)という事柄をあげていた。ところがこの内容は、後に『校本宮沢賢治全集第十四巻』に挿入された正誤表によって、「十三年二月から十五年三月」の箇所が「十三年四月から五月」と改められた。(他に、「松田浩一」も「川村(現姓長坂)俊雄」<sup>(20)</sup>と訂正。)即ち川村俊雄による筆写の時期が大正十三年四月から五月と限定されたわけで、この方が多田幸正の「大正十三年頃には書き上げられていた可能性が強い」という説に都合はよい。

確かに、筆写するためには「書き上げられてい」なければならぬ。しかし、川村俊雄の筆写分が途中の第五葉以下となっているのは、筆写させた後に冒頭部分から順に賢治が書き直して行ったことを意味しよう。筆写させる前の原稿を「大正十三年頃には書き上げ」たとしても、第一〜四葉の自筆稿はその後に書かれたものである<sup>(21)</sup>。そして、「古びた写本」の内容の箇所は、冒頭に程近い賢治自筆部分、第二葉から第三葉にかけて書かれているのだ<sup>(21)</sup>。この書き直し迄の間に、『山の人生』の山姥が酒を買う話を撮取し「古びた写本」の話として新しく組み入れたという想定が可能である<sup>(b)</sup>。

## 二 『廣文庫』

もう一つ、先行研究が触れていない参照典拠の可能性を示したい。『廣文庫』である。

安藤恭子に、「山男の四月」の「山男の「外見」」他に關して、『遠野物語』に「散見される」のは「眼・顔色の共通点のみであつて、髪については」「山女の項にあるのみである」ので、

そこで資料を広げて同じく柳田国男の「山人外伝資料（山男山女山姥山童山姫の話）」（『郷土研究』大2、3、4、8、9<sup>(c)</sup>）を試みに開いてみると、「乱髪」（東武談叢）、「頭の髪赤くちぢみて」（雪窓夜話上）と髪についての共通の特徴があらわれる。さらに「山人外伝資料」には、「山男の四月」冒頭部の（兎をねらつて<sup>ママ</sup>いたが山鳥がとれた）という山男の行動と類似する話が掲載されている。それは「彼等は谷川の魚又は山鳥羚羊等の肉を生で食つたらしい。此は人の想像し得ることであるが、慥な史料もあるのである。」という柳田の説明に続く「北越雑記卷十九」で、その一節には「其形裸身にして長は八尺ばかり、髪は肩に垂れ眼の光星の如し。手に兎一つ提げて静かに歩み来る。」とある。柳田の説明も含め、山男の食料、獲物を手に登場する様は本作の冒頭部を彷彿とさせる史料である。<sup>(24)</sup>

（傍点安藤、ママは工藤）

という指摘があるが、直接参照のより強い可能性として、『廣文庫』の「やまをとこ」（振漢字省略、以下同様）の項の記述を挙げたい。次の通り。

遠山著聞集、後編、三（此の山<sup>金峰山</sup>は山夫といふものありて、人をみると其の人をよぶ事こたまの如し、お、い、く、と二聲三聲つゞけて呼ぶ時ハ、山人とてもあてて、山を遁下るなり、おおいと一こゑあることハ折々あれど、是れハ少しも障なし、二聲三聲ハ、決して引きつれて行方あらず成行くもの、むかしも今もかゝることなし、其の形ハ人間ハ三倍ほどよて、亂れ髪長きこと腰を過ぎたり、年々かさハ髪赤黒し、髪<sup>の</sup>白けて艶なきハ定めし年つもりとる者なるべし、木の葉を繋ぎて箕の如くまて身よつけたり、體ハすべて毛だらけよていとおそろしく、折々小獸を携へて事あれば、それらの物を常々喰ふとみえたり、<sup>(26)</sup>

〔後略〕

（——線工藤、以下同様）

「より強い」と判断した理由は、（安藤恭子の指摘する）「山人外伝資料」の「乱髪」他の三つの箇所は、出所がばらばらである（掲載誌の発行年で最大四年の隔りがある<sup>(27)</sup>）のに、右は丁度それらに相当する内容が近接して一所に現われているから、



れを脱くものが多い。莊内の山でも杣  
がこれを拾つて来て、小屋の柱につる  
して置いたら、夜のうちに見なくな  
つたなど、謂つてゐる。

上州の妙義、榛名などでも、瀧師、  
木こりの徒、山中でこの物を見る

ご書いてあるが、假にこれに相應す

る足の持主があるとしても、そんなも  
のを履いて山の中があるけたものでな  
い。我々の草履でさへも、野山を盛ん

に飛廻つた時代には、足半と稱して足  
一杯のものは履かなかつた。大抵は指

疋につけて戻るくらゐの、マダの皮の

分量であつたなど、謂ふ。全體に今で  
はもう話になりすぎてゐる。それとい  
ふのが風説ばかり次第に高く、實際に

出逢つたといふ人が、次第に少くなつ  
た結果である。(34)

とあり、『廣文庫』にも、

「前略」予が竹馬の友石川何某先年木曾方まで在勤をなし、年々深山へ入りとる時、山男の草鞋と云ひ傳うる物の捨てあるを二度見と  
り、藁よてハなく藤の皮よて造りとる物よて珍敷品也、今ならば拾ひ來り人よも見せ申すべきよ、若き節も心なく見捨來りしハ殘  
念との事也、其の大さ佛足長三三  
尺半よとさ給うて宜しかるべき程よ見請けしといへり、〔後略〕(35)

と出ている。三つ共に典拠の可能性ありだが、特に草履「の大きさ」を「佛足」に譬えた『廣文庫』の記述が賢治の心に焼  
き付いたのではないだろうか。ここから、賢治に、山男Ⅱ仏の化身という考えが閃き、(賢治は、)「亮二」に、「佛足」に  
対するお賽銭として「しゃがんで、その男の草履をはいた大きな足の上に、だまつて白銅を置」(36)かせた、又は仏足頂礼  
(Ⅱ「佛の足にぬかづきて禮拜すること。佛教に於て最も丁重なる敬禮法なり」)をさせた(そういう氣持を込めて描いた)のではな  
いだろうか、と想像することは飛躍に過ぎるであろうか。(37)

多田幸正は、「山人外伝資料」に引用されている「周遊奇談」の文章を引用し、次のように述べた。

「祭の晩」との関連を示す二点目は、(三)の『周遊奇談』の中の「甚だ正直なる者」という記述である。山男の性格を表現した言葉として、貴重だが、この性格規定が亮二のおじいさんの「山男といふものは、ごく正直なもんだ」という断言や、亮二自身の「悪い人でない。却つて正直な人なんだ」という捉え方に符合するのはいうまでもない。とくにおじいさんの「ごく正直なもんだ」という記述は、『周遊奇談』の表現にきわめて近い。このほか、やはり『周遊奇談』から引いたものの中に「尤も悪きことはせず、至つて直なる由なり」というような類似の表現のあることも付け加えておく。「後略」<sup>(41)</sup>

(ママは工藤)

妥当な指摘と思うが、実は『廣文庫』にも、「山人外伝資料」の引用している「周遊奇談」の話とほぼ同じ(少し字句・内容に異同がある)引用文が載っているのだ。「山人外伝資料」の引用しているのに相当する部分を全文次に示す。

周遊奇談、三(豊前國中津領の山賤など奥山より木を伐出すときよ、馬牛通ひがとき所へ此の山男といふものは頼み、山の口まで出させるよ甚だ便なりとぞ、予廻歴之節炭焼ける山よてたゞ一度見たり、こゝ後よいふべし、まづ右中津領の山男ハ大かゝ長六尺まゝ高さハ六尺四五寸もあるべし、太りありて力量至つて強きものなり、それよ右のごとく材木を負せ出すよ一向人と言語をなさず、唯此方のいふことハ聞分くるとみえさり、此の木を山口の何といふ所までいざしくれよ、そのちんよ此のにぎり飯を一つ遣すべしと約束す、まゝもし此の木二本持とバ二つやらんといへバ、其のそむよよりて此の木を持ち見る、二本持てるとおもへバ二本一所のよしよそむへよせるなり、是至つておをし、惣身人よ同じくて毛多し、尤も裸なり下帯とともなし、男女老るしハあれど股のあとりハこ<sup>(42)</sup>とよ毛深く、たゞ眼色と大小よて女男を区かつなり、甚だ正直なるものよて、約を違ふれバ大よいかり、大木よりともみちんよなして此の人を忘れず、若し重ねて逢ふ事あれバ、無二無三よ飛付きて半死半生よなす事なり、ほかよもあらず、にぎり飯二つといふを一つ遣とし杯よる折から也、此の様子有様蝦夷人よひとしからん歎、山内よて往來の所限りあると見えたり、其所よりハすこしも里へいせず、岩角或ハ谷川いかやうの所よてもゆとりくと歩む、川深ければ牛のごとくつむりの見えぬ川も、底を平地のごとくあゆみ行く

なり、牛右のごとし、男ハ大方肥えて色青黒し、又山女ハ其の形男トハ大ニ異なり、木の葉まゝ木の皮ていのものを割りてむしろのごとく編綴り、それを身よまとふ也、色青白し、男よりハ丈も少しひくし、瘦せたるかとなり、これハ中々一寸ハ人の眼よか、れどぞへよらず、いかやうの場所に住ひ居るやあるものなし、たま〜獵人など深山の窟なども睡り居ることもありとぞ、國よよりてハ住む國に住まぬ國、山よもよるや有無あれがさし、仙人など、ハやうす異なるものなり、仙人まゝ人の山林ニ籠りて松葉杯食し、まゝ木食の類、あまゝ住居る所もあり、こハ別ニ條條をなし後云云云、平生食類ハ何をなすとおもふよ、おほく木の實まゝ鳥獸もそれ〜の取物をこしらへ生物を食す、或ハ其の皮を著も去敷きもすると見えたり、鳥毛もあかなり、つなぎ尤ふぢかづらをさき絲のごとくまてなすことなり、故ニ齒ハ男女ともよ至つて白し、犬まゝ人も孩がむり杯冷物を食とするし白し、まかし甚ぞ穢れたる匂あるよし、但しおのれ炭焼小屋ハ一夜をあかせし折から見さるハ、出羽國仙北といふ所より水なし銀山安丹あにといふへ、常陸内といふ山ごえて近道をゆかんとまて道踏まよひ、そこよとまりしなり、此所の山男ハ形狀豊前と同じなれど力量もあれず、木も炭も石も何よても負ひもせず、唯をり〜其の小屋へ來り食時などの時分を考へ來るとなり、ゆゑよめし杯是れもにぎり遣せせばよるこびて持ちまりぞく、人の見る所よてハ食せずとなん、いかにも力ハありさうなり、ものいとす、のさ〜立廻り歩悪しきまはせず至こハ其所のならせと見えて、中津のやうすとハ山男の狀ハ同じかれど業なし、これも右の如くなさば隨分く計なりつて直なるよし也人ハ使さるゝなるべし、蝦夷の化するよひとしからんう、こゝよてハ山女ハ見えずまゝさたもなし、(43)

賢治は、——線部①の内容を逆転させて「正直なる」山男に、「此の人「亮」を忘れず」、「約」束通り、「大木」を「みぢんにな」させて「太い薪」(44)を作らせたのではなからうか。ただ、同一内容だから、典拠の可能性は両方にある。そこで、——線部②を見て頂きたい。

——線部②中の「木の實」が山男が「持ってきた」(45)「栗」と照応するわけだが、実はこの中の「鳥獸もそれ〜の取物をこしらへ」の部分が「山人外傳資料」では「鳥獸それ〜の得物(46)を求め」となっていて、意味の取りにくい（というより殆ど意味をなさない）記述であるのに対し、『廣文庫』の方は、ずばり、

「さうさ、木の枝で狐わなをこさえたりしてさうだ。かういふ太い木を一本、ずうつと曲げて、それをもう一本の枝でやつと押へて置いて、その先へ魚などぶら下げて、狐だの熊だの取りに来ると、枝にあたつてばちんとはねかへつて殺すやうにしかけたりしてさうだ。」<sup>(47)</sup>

の典拠たる資格を有していると言えるのではなからうか(「こしらへ」と「こさえ」という殆ど同一と言つていい語の類似もある)。

最後にもう一箇所、『廣文庫』より引こう。

百物語、五(遠州秋葉の山奥などよハ山男といふものありて、折りふし出づること有り、柚山賤の重荷を負ひたすけて里近く迄來りてハ山中へ戻れり、家もなく従類けんぞくもなく、常よすまふ所さらよまる者なし、賃錢を興ふれどもとらず、只さけをこのみて興ふれバ悦びつゝ呑めり、ものごし更よせからされバ啞よをしふるごとくするよ、其のさとり得ること至つてとやし、始もあらず終もあらず、せいの高さ六尺よりひくきハなし、山氣の化して人の形となりたるなりと云ふ説有り、昔同國あらくら村といふ所よ又藏と云ふ者あり、病人有りて醫を呼びよ行くとて、谷よふみそづして落入りけるが、樹の根よて足をいよめあむむこと能はずして、たにの底よ居よりしが、山男いづこともなく出來りて又藏を負ひ、屏風をたてよるが如き所をやすくと登りて、醫師が門口迄いよりてかきけすがごとくようせより、又藏ハうれしさの餘り是れよ謝せんとさよえよ酒を入れて、かの谷よいよるよ、山男二人迄出て是れをのみ大いよ悦びて去りしとぞ、此の事古老のいひ傳へて今よ彼の地よてハまる人多し、合壁故事といへる書よ木客とあるハ則ち山男のことなり、木客が詩よ「酒蕪きて君沽ふこと莫れ、壺傾きて我れ當よ開くべし、城市髣塵多し、山よ還つて明月を弄ぞん」と有り、さすればもろこしの山男ハ、すこしハ學才もありて詩などを作るとみえより、秋葉の奥の山男ハ文盲よして只酒をくり呑みゐるとあらる、文盲よして酒をくり呑みぶらつきで居んよりハ、ほそもとでよても地みちよかせぎよらんよハ、よき商人ともなりぬべし、今や世間よも山男多くあれども、一足飛よどか儲せんことのみをよかりて長範が當吞、いまだ手よも入らざる先よ奢るが故よ世よ出づる事なし」<sup>(50)</sup>

——線部①③の山男が酒好きであるという記述が、「紫紺染について」の山男が「しきりにかぶりかぶりとお酒をの<sup>(51)</sup>」む「アルコール中毒<sup>(52)</sup>」者であるように描かれていることの典拠の可能性があらう、ということをお願いしたいわけであるが、この「百物語」の話と殆ど同一内容（少し字句に異同あり）の話が、出典を「桃山人夜話五<sup>(53)</sup>」として「山人外傳史料<sup>(54)</sup>」に、「桃山人夜話卷三」<sup>(55)</sup>として『山の人生』に出ている。そして後者（『山の人生』に出ている話）については、既に鈴木牧雄・森井弘子に指摘がある。だから、酒好きという点に限れば、三点とも典拠の可能性は同等と言える。——線部②に「山男もずるぶん賢いもんだな<sup>(56)</sup>」の典拠の可能性を見たいのであるが、これも同断である。

ところが実は、『廣文庫』の引用文は、「山人外傳史料<sup>(57)</sup>」及び『山の人生』に記されていない部分を含んでいるのだ。「合璧故事と」以下終り迄がそれである。賢治はこの箇所を読んで、「紫紺染について」の山男を「知って〇置くべき日常の作法。」といふ本<sup>(58)</sup>も読むことのできる詩人（「お日さまがおつくりになるのです<sup>(59)</sup>」に仕立て、且つ、最後に「紫紺について」<sup>(60)</sup>「一生懸命思ひ出<sup>(61)</sup>」させて、「酒ごらり呑みぶらつきて居<sup>(62)</sup>」る山男という悪評を返上させたのではなからうか。

『廣文庫』は、山男に関するデータが一所に集められ、『廣文庫』のみが示す情報も含めて山男情報虎之巻の観を呈する。賢治が活用した可能性が強いのではなからうか。<sup>(j)</sup>

〔注〕

(a) これとほぼ同じ話が「遠野物語拾遺」一〇〇に出ている。次の通り（上部の小見出しを省略）。

一〇〇 青笹村の某といふ者ある日六角牛山に行つてマダの木皮を剝いで居ると、出し抜けに後から呼ぶ者があるので、驚いて振向いて見れば、たけ七尺もあらうかと思ふ男が立つて居て、自分の木の皮

を剥ぐのを感じて見てゐたのであつた。さうして其木の皮を何にするかと訊くから、恐る恐るその用途を話してきかせると、そんだからおれも剥いですけると言つて、マダの木をへし折り皮を剥ぐこと、恰も常人が草を折る様であつた。忽ちにして充分になつたので某はもうよいと謂ふと、今度は大男、傍の火であぶつて置いた餅を指さして、少しくれと謂ふ。某はうなづいて見せると、無遠慮に皆食うてしまつた。さうして言ふことには、あゝうまかつた。來年の今頃もお前は又來るか。若し來るならおれも來てすけて遣らうから、又餅を持つて來てくれと言つた。某は後難を恐れてもう來年は來ないと答へると大男、そんな餅を三升ほど搗いて、何月何日の夜にお前の家の庭に出して置いてくれ、したらお前の家で一年中入用だけのマダの皮を持つて行つて遣るからと言ふので、それ迄も斷りきれずに約束をして別れて來た。其翌年の約束の日になつて、餅を搗き小餅に取り膳に供へて庭上に置くと、果して夜ふけに庭の方で、どしんといふ大きな音がした。翌日早朝に出て見れば、凡そ馬に二駄ほどのマダの皮があつて、もう其餅は見えなかつたといふ。此話は今から二代前とかの出來事であつたといふが、今の代の主人のまだ若年の頃までは、毎年の約束の日には必ずマダの皮を持つて來てくれたものであつた。それが如何したものか此三十年ばかり、幾ら餅を供へて置いても、もうマダの皮は運ばれないことになつたといふ。<sup>(6)</sup>

「庭の方で、どしんといふ大きな音がした」という言葉遣いは、より「祭の晩」のそれと似ている。が、『遠野物語増補版』の刊年（昭和十年）が賢治の死後だから、直接の影響関係はあり得ない。続橋達雄に「餅と交換にマダの木皮をむいたり」という指摘があるが、「賢治をとりまく環境の一端が窺え」というとらえ方で、（当然乍ら）直接参照した風には言っていないし、境忠一も「祭の晩」の場面が「拾遺第百話の、「中略」という場面を思い起させる」という言い方でのみ言及している。<sup>(7)</sup>

これに関して、青山和憲が次のような指摘をしている。

境忠一氏が『遠野物語』と賢治の山男もの（桜楓社刊『宮沢賢治論』所収「ママは工藤」）において、夙に柳田の『遠野

物語拾遺』第一〇〇話と賢治の「祭の晩」の末尾が著しく類似していることを指摘している。しかし、『遠野物語拾遺』の出版は賢治没後の昭和十年であり、また同書に収録されている話の多くは、『遠野物語』以降に喜善が雑誌等に発表した遠野の伝承記録を、多少語り口を改めて再録したものである。第一〇〇話は、大正二年『郷土研究』誌に発表した「遠野雜記」十四と全く同内容であるから、その再録であると考えられる。すなわち、賢治の「祭の晩」の末尾部分が他者の著述から何らかの影響を被っているとすれば、それは喜善の「遠野雜記」十四を措いて他にない。(9)

「遠野雜記」十四の内容(参考の爲、全文)を次に、初出の『郷土研究』から引用しておく(青山和憲は「遠野市立博物館『佐々木喜善全集』第二卷」<sup>(10)</sup>より引用している(この全集工藤未見)。字句の異同がある)。

## 資料及報告

### ○遠野雜記

(十四)遠野郷青笹村の某、ある日六角牛山に行つて、マダの木の皮をはいでゐると、突然に後から誰かに呼びかけられた。驚いてふりむくと、丈七尺餘もあらんと思ふ大男が立つてゐて、木の皮をはぐのを感心して見てゐたが、終にその木の皮を何にするかと問うた。某は恐る恐るその用途を答へると、そんだったらおれもはいで助けると言ふて、手もてマダの木をへし折り、皮をはぐこと宛も常人の草を折るやうであつた。忽ちにして充分になつたので某はもうよいと云ふと、

これは其家の今の代から二代ばかり前の人の話であるが、その後毎年今の代の人の若年の頃までは、約束した日をさしてマダの皮を持つて来てくれた。それがどうしたのか此の三十年ばかりはいくら餅を供へておいてもマダを持つて來なくなつたとのことである。

この話によく似たのが二戸郡淨法寺村にある。淨法寺村宇野田の某、ある日山へ行くと途中で大男と道伴になつた。大男がお前のしよつてゐるものは何だと云ふて、持つてゐた餅を弄りたがつて仕様がなかつた。で某は餅だと云ふと、そんだったら少いでいゝからくれと言ふた。分けてやると非常に喜んで、お前の家でははあ田をうつたかと云ふ。

大男おほをとここんどは傍そばの火であぶつて置いた。餅もちを指さして少すこしくれと言ふ。某たがひはうなづいて見せると、無遠慮むえんりょに皆食みなくふてしまつた。そして言ふ「ことには、あうまかつた。來年らいねんの今頃いまごろもお前は此處こゝに來るか、もし來るならおれも來て手傳てつたつてやらうから又餅またもちを持つて來てくれと。某たがひは後難こうなんを恐れて、もう來年は來ない、と云ふた。大男おほをとこ、そんだったら餅三升もちさんしょうほどついでお前の家の庭にはに何月何日の夜おいてくれ、そしたらお前の家で一年中入用にようちゆうだけのマダの皮かわを持つて行つてやるから、と言ふので某たがひも斷ことわりきれずその事を約束やくそくして別わかれた。その翌年あしたねんになり何月何日なにげんげつなにげん(借かしい事には月日を忘れた)の夜、餅もちをつき小餅こもちにとり膳ぜんに供ともへて庭にはにおくと、夜更よふかけに庭にはの方で、どしんと云ふ音がした。翌朝あしたあさ早々ささ起きて出て見れば、凡おほそ馬二駄うまにだほどのマダの皮があつて、その餅もちは無なかつた。

まだ打うたないと云ふと、そんだったら打てやるから何月何日の夜、三本鍬さんぼんくわと一緒に餅を三升ほどついでお前の家の田たの畔はたにおけ、おれが行つてうつてくると云ふので、某たがひも面白おもしろいと思ふて承知しょうちした。其夜餅そのよるもちをついて畔はたへ持つて行つておいた。翌朝あしたあさ行つて見ると、三本鍬さんぼんくわは元の畔はたの處ところに置いて餅もちはもつて行き、いかに田たはよく打つておいてくれたが、甲乙あつちやうの差別さべつなく一面いめんにうちのめしたので、大小おほいさの畔はたと自他じたの區別くわくべつも分らずに起おこされてゐた。その後某そのちのちは度々たびたびその大男おほをとこと逢あつた。友ともだちになつたので山やまへ行く度に餅もちをはたられて困こまつたと云ふことだ。大男おほをとこの云ふには、おれはひどく善よい人間にんげんだが、おれの妻かみは悪い奴やつだから見られないやうにしろと、度々云ひ聞かしたとのことである。餘あまり古ふるくない話はなしであるらしい。五六十年前のことだと言ふてゐた。<sup>(11)</sup>

(傍点佐々木)

青山和憲による「遠野雜記」十四の発見・指摘は學術的貢獻度が高いと言えよう。しかし、「を措いて他にない」と迄斷言できるであろうか。参照典拠の可能性として、「遠野雜記」十四の優勢は動かないが、『山の人生』もあわせ参照していた可能性が全く無いとは言えない。

(b) 鈴木牧雄も『山の人生』に書かれた山姥の酒買いの話に言及し、「賢治が伝承を意識していたとも考えられよう」と述べてい<sup>(22)</sup>

る。又、青山和憲も、「柳田の『山の人生』二六「山男が町に出て来たりしこと」に、山姥が、三合ほどの徳利に五升の酒を入  
れさせたという類似の話が見える」(ママは工藤)と指摘している。

(c) この発行年月の表示が分りにくい。大正2年3月、4月、…の意味の筈であるから「大2」の次の読点を中黒にしたらいだ  
ろう。尤も同論文を後に改稿収録した安藤恭子『宮沢賢治〈力〉の構造』(96・6・1第一刷未見 96・7・2第二刷所見 朝  
文社)一二六頁では、「大正二、三、四、五、九年(一九一三、一四、一五、一六、二〇)」と記されているので、忠告は的はず  
れかも知れぬが。又「9」で終わっているように書かれているのが間違いであるのは、先に出典注(5)で多田幸正に関して述べ  
たのと同断である。

(d) 安藤恭子は賢治が直接参照したと言っているわけではない。「もちろんこのことは、『遠野物語』と『山人外伝資料』が『山男  
の四月』の原典である、という結論を導きはしない。問題は『遠野物語』だけではなく、もっと多くの要素が『山男の四月』の  
成立に關与している可能性がある、という点だ」と述べていて、拙論とは少しく趣を異にする。

(e) 安藤恭子指摘の「其形裸身にして」云々の箇所を含む「山人外伝資料」の引用と殆ど同一内容の文章が、実は『廣文庫』にも  
示されている(但し、出典を異にし字句の異同もあり)。次の通り。

北越奇談、四(高田大工又兵衛弟某、西山本は雇それ數日留りけるが、ある夜急げる私用ありてひとり山路を歸りしは、岨道の  
引回りたる所よて不慮大人は行逢ひたり、其の形赤身にして長八尺ぞくり、髮屑はたれ、目の光星のごとく、手は兔一つを提  
げ去るかよ歩行來る、大工驚きて立止れば、かの大人も驚きとるさまよて立止りしが、つひは物もいえず路を横ざりて山は登  
り去りぬといへり、是等もかの山男なるべし、)

(f) 「赤髮」という言葉の含まれているこの箇所の内容と殆ど同一内容の文章が『山の人生』にも引用されている(但し、出典を異  
にし字句の異同もあり)が、制作年次から、「山男の四月」とは無関係である。

(g) 常不輕菩薩は仏の過去世の姿であった。「爾の時の常不輕菩薩は、豈異人ならんや。則ち我が身是なり」・「彼の時の不輕は  
則ち我が身是なり」(傍注省略。「妙法蓮華經常不輕菩薩品第二十一」)。

(h)「やまをと」の項の次の項が「やまをんな」で、そこに、山男が仕掛けるものではないが、獣を取る装置のことが次のように記されている。ヒントぐらいにはなったかも知れない。

「前略」惣じて彼の邊までハ菟道弓といふものを作りて獸を取る事なり、けもの、通ふ道をウヂといふ、其の道を考へ知りて其所へ弓をまかけ置く、絲を踏めバ弓發して貫く機關なり、狼猪なども皆此の弓よて多く取得るとぞ、〔後略〕<sup>(48)</sup>

なお、山崎善男に「狐わな」に関する考察がある。<sup>(49)</sup>

(i) 森井弘子は資料名を「柳田國男『山の人生』24 / 「アサヒグラフ」<sup>1926</sup>年<sup>(57)</sup>」(原文横書き)と記しているが、「山の人生(二四)」が掲載された『アサヒグラフ』第四卷第廿六號の発行年月日は「大正十四年〔工藤注…一九二五年〕六月廿四日<sup>(58)</sup>」であり、「1926」は刊本『山の人生』の刊年である。又、山男が酒好きであるという記述は初出の『アサヒグラフ』には載っていないが、『山の人生』刊行時に増補された部分である。従つて「(アサヒグラフ)1926年」という出典表示は二重におかしい。

(j)『廣文庫』と賢治の関わりについては、別稿「オツベルと象」の象、又は白象<sup>(68)</sup>でも言及した。参照されたい。

(1) 多田幸正「祭の晩」と「山人外伝資料」(作品名にキッコー無しは多田幸正の記述のまま。多田幸正『賢治童話の方法』〔平8・9・30 勉誠社〕五七頁)。

(2) 以上、同右、五八頁。

(3) 『新校本宮澤賢治全集 第十卷 童話Ⅲ 本文篇』(95・9・25 筑摩書房)一八二頁。以下同書よりの引用は頁数のみ示す。又同全集を『新校十本文』という風に略記し発行所名を省略する。

(4) 柳田國男『山の人生』(大15・11・15 郷土研究社)二四四〜二四五頁。なお、この引用は、原本からスキヤニングによる画像処理を施したものである(『山の人生』からの引用は以下同様)。以下、同様のものを「」で示す。

(5) (前出)多田幸正「祭の晩」と「山人外伝資料」、五八頁。なお、多田幸正が示している「山人外伝資料」の書誌(五七頁)中、「大正三年」は「大正二年」の間違いであり、又「九月」で終りのように記しているのも間違いで、もう一篇、「第四卷第十

- 一號 大正六年二月一日發行（原誌未見 郷土会（郷土研究会）編『郷土研究（全六冊）第四冊（複製版）』（昭51・1・24 名著出版）所見 当該号裏表紙による）に掲載された分がある（但し標題は「山人外傳史料」）。
- (6) 柳田國男『遠野物語増補版』（昭10・7・31 郷土研究社）二〇一〜二〇三頁。㉞
- (7) 以上、続橋達雄「山男について」（『四次元』第八卷第二号 通卷六九号〔昭31・2・10〕六頁）。
- (8) 境忠一「遠野物語」と賢治の山男もの」（『校本宮澤賢治全集 第九卷月報』74・1 筑摩書房）二頁。のち境忠一『宮澤賢治論』（昭50・11・10 桜楓社）収、一三〇頁。後者では『遠野物語』とカギが二重になった他、文字遣いの異同がある）。
- (9) 青山和憲「宮澤賢治の『山男もの』——その素材と独自性についての一考察——」（上）（『言文』第四十号〔93・1・31 福島大学教育学部国語学国文学会〕三七頁）。
- (10) 同右、四三頁。
- (11) 「資料及報告」欄中の佐々木繁「遠野雜記」（十四）（署名は最終文末に「佐々木繁」とあり。『郷土研究』第壹卷第九號〔大2・11・10〕四七〜四八（通五五九〜五六〇）頁。㉞
- (12) 中野隆之「祭の晩」——山男を中心に」（初出『つくし野』第12号〔89 福岡県高等学校国漢部会福岡地区〕未見 中野隆之『宮澤賢治童話作品論集』（96・8・27 葦書房）所収所見 一五頁）。
- 武田直子「祭の晩」にみる賢治の山男について——山男と里人との相互的關係への変化をたどる」（『注文の多い土佐料理店』第6号〔02・12・31 高知大学人文学部人間文化学科鈴木健司研究室〕七〜八頁）。
- (13) (前出) 柳田國男『山の人生』二四五〜二四六頁。
- (14) 以上、一八四〜一八五頁。
- (15) (前出) 多田幸正「祭の晩」と「山人外傳資料」、八二頁。
- (16) (前出) 柳田國男『山の人生』二〇一〜二〇二頁。
- (17) 多田幸正「賢治童話と山人譚」（『湘北紀要』第14号〔平5・3・31〕三〇頁）。
- (18) 同右。

- (19) 同右、三九頁。
- (20) 以上、『校本宮澤賢治全集第十四卷』(昭52・10・30 筑摩書房)に挿入された『校本宮澤賢治全集 全卷正誤表』七頁。
- (21) 『新校十六(上) 草稿通観』(99・4・25)一九一頁。
- (22) 鈴木牧雄「賢治と山男」(『ポラーノの広場』第8号(86・5・28 駒澤大学宮澤賢治研究会。号数は奥付に表示なき故、背文字による。発行年が奥付では「一九八六年」となっているが背文字では「一九八七年」である。これは奥付の表記が間違っていると思われる)九頁)。
- (23) 青山和憲「宮沢賢治の『山男もの』(中)——その素材と独自性についての一考察——」の「注8」(『言文』第四十一号(94・1・31 福島大学教育学部国語学国文学会)四七頁)。
- (24) 以上、安藤恭子「山男の四月」論——なぜ、「山男」は登場したか——(『国文学 解釈と鑑賞』709 第55巻6号(平2・6・1) 二二八〜二二九頁)。
- (25) 同右、一二九頁。
- (26) 物集高見『廣文庫第拾九冊』(大5・12・1 未見 大15・7・15 再版所見 廣文庫刊行會)八〇二頁。以下同書を『廣』と略記する。㊦『廣』からの引用は以下同様
- (27) 「亂髮」は『郷土研究』第壹卷第壹號(大2・3・10)四四(通同じ)頁、「頭の髮赤くちゞみて」は同第四卷第十一號(大6・2・1 初出未見 (前出)郷土会(郷土研究会)編『郷土研究(全六冊) 第四冊(複製版)』所見)三八(通六七八)頁、「其形裸身にして」云々は同第壹卷第六號(大2・8・10)二九(通三四九)頁。
- (28) 『廣』八〇一頁。
- (29) 同右、八〇〇頁。
- (30) (前出)柳田國男『山の人生』一七六〜一七七頁。
- (31) 武田直子は題名もキッコ―無しの「祭の晩」と書き、作品本文の引用も現代仮名遣いとなっていて、引用の底本が示されていない。今は一応『新校』より引用しておく。(前出)『新校十本文』一八一頁。
- (32) (前出)武田直子「祭の晩」にみる賢治の山男について——山男と里人との相互的關係への変化をたどる——、四頁。

- (33) 武田直子は引用の底本を示していないので、武田直子の引用しているまゝを写して示した。同右、五頁。なお原本(複製本)では、柳田國男『遠野物語』(書名は複製原本奥付に記載なき故、巻頭による。初刊明43・6・14 賣捌所・聚精堂未見 名著複製全集近代文学館・編集委員会/代表者 稻垣達郎編『柳田國男著 遠野物語 聚精堂版』(昭43・9・10 刊行・日本近代文学館 発売元・図書月販) 所見)二七〜二八頁。
- (34) 引用は、柳田國男「山の人生(二八)」(『アサヒグラフ』第五卷第四號(大14・7・22)五頁)。(前出)柳田國男『山の人生』なら「二八 三尺ばかりの大草履の事」という章題で、二二三〜二二五頁だが、言葉・内容が増補されている。
- (35) 『廣』八〇二〜八〇二頁。
- (36) 以上、一八一頁。
- (37) 織田得能『訂補仏教大辭典(縮版)』(大6・1・5 未見 昭5・11・15 縮版所見 大倉書店)一五六〇頁。
- (38) 島地大等『妙法蓮華經』(書名は奥付による。扉・背文字では「漢和對照」の角書あり。大3・8・28 未見 昭3・2・15 二十八版所見 明治書院)四九七頁。
- (39) 同右、五〇一頁。
- (40) 同右、四九一頁。
- (41) (前出)多田幸正「祭の晩」と「山人外伝資料」、六八頁。
- (42) 久米長目「山人外傳資料(山男山女山丈山姥山童山姫の話)」(『郷土研究』第壹卷第七號(大2・9・10)三二〜三二(通四一五〜四一六)頁)。
- (43) 『廣』八〇三〜八〇四頁。
- (44) 一八二頁。
- (45) 以上、同右。
- (46) (前出)久米長目「山人外傳資料(山男山女山丈山姥山童山姫の話)」、三二〜三二(通四一五〜四一六)頁。
- (47) 一八二頁。

- (48) 『廣』八〇六頁。
- (49) 山崎善男「作品研究「祭の晩」」(作品名にキッコー無しは山崎善男の記述のまま。『賢治研究』91〔平15・9・25〕三〜五〔通四八六五〜四八六七〕頁)。
- (50) 『廣』八〇四〜八〇五頁。
- (51) 一八八頁。
- (52) 一八九頁。
- (53) 久米長目「山人外傳史料」(初出『郷土研究』第四卷第十一號未見 (前出) 郷土会 (郷土研究会) 編『郷土研究 (全六冊) 第四冊 (複製版)』所見 三八〜三九〔通六七八〜六七九〕頁)。
- (54) (前出) 柳田國男『山の人生』一八六〜一八七頁。
- (55) (前出) 鈴木牧雄「賢治と山男」、五〜六頁。
- (56) 森井弘子「宮沢賢治「紫紺染について」の研究―主人公を中心に―」(『東大阪短期大学研究紀要』第19号〔94・1・25〕四六頁)。
- (57) 同右。
- (58) 『アサヒグラフ』第四卷第廿六號(大14・6・24)五頁。
- (59) 一八二頁。
- (60) 一八六頁。
- (61) 一八七頁。
- (62) 以上、一八九頁。
- (63) 工藤哲夫「オツベルと象」の象、又は白象」(『女子大國文』第百三十四号〔平15・12・30〕四六〜五〇頁)。

(本学教授)